No. 1248

飛鳥田新体制へ

成田委員長の後任人事等で混迷を続けていた社会党は12月13日、東京・九段会館で、第41回定期全国大会の続開大会を開き同夜おそく、飛鳥田委員長—多賀谷書記長コンビによる新体制をスタートさせた。この大会は、社会主義協会規制をめぐり、混乱した9月大会を受けて開かれたもので、焦点は、やはり人事問題であった。大会の舞台裏では、終始調整が続けられたがなかなか決着がつかず、しばしば休会となった。しかし、党三役については、成田委員長が示した、多賀谷書記長、下平、北山、阿具根各副委員長の線で落ち着き対立候補の出た残る中執三ポスト、総務局長、青少年局長、国民生活局長をめぐる選挙に移った。全役員の選出を終えた後、飛鳥田委員長をはじめ新役員が登壇、成田前委員長の退任のあいさつに続いて、飛鳥田委員長が次のようにあいさつした。「日本社会党を作り直すため、私はここに立っている。社会党を広範な勤労国民の共有財産にしていこうと心に誓っている」難産の末、どうにかスタートについた〝飛鳥田体制〟だが依然残る党内抗争も含め、その前途は余りにも厳しい。

救急隊出場

年末を迎え、酔っぱらい運転による交通事故などが多く発生します。東京消防庁にある救急情報センター。毎年この時期に入ると救急車を呼ぶ電話が増加し、1日平均700件にも及びます。こうした状況に対処するために東京都内の各消防署では対策会議が開れています。救急車の出場が増えるといつも問題になるのが救急車の正しい利用法だといいます。救急隊の隊員のひとりは「希望することは、救急業務の正しい知識を身につけ救急車は正しく有効に利用してほしい」と話します。一担、指令を受けると救急隊は出場しなければなりません。救急車の利用が安易すぎたり、逆に利用方法がわからなかったりすると、急を要する人が時期を失って大事にいたることがあります。人命を左右する救急活動だけに救急隊はつねに万全を期しています事故に直面した時に適切な救急サービスが受けられるために救急車は正しく理解して利用することが必要です。